

平成 29 年度 真壁城跡中城庭園の調査

今回の調査の 2 つのポイント

- ★庭園の北西部の継続調査。 ⇒ 「大規模な溝跡」の性格解明
- 北池の周辺部の調査。 ⇒ 庭園に伴う施設の発見

【真壁城と調査の目的】

真壁城は室町～安土桃山時代に築かれた真壁氏累代の居城で、平成 6 年（1994）国史跡に指定後、平成 9 年（1997）より保存や整備を行うことを目的とした発掘調査を開始。

【中城庭園の過去の調査成果】

①平成 16・17 年度

中城地区中央部の南側を調査し、池跡（南池）や大規模建物跡群、能舞台跡、茶室（茶屋）跡、石組水路跡などを発見。出土遺物から概ね 16 世紀後半から慶長 7 年（1602）に真壁氏が秋田へ移転するまでの安土桃山時代の庭園跡（当主真壁氏幹）であることが判明。

②平成 26・27 年度

中城地区中央部の北側を調査し、池跡（北池・水路状の池）や茶室（茶屋）、園路などを発見。庭園の池は南池から水路状の池を通して北池へ水が流れる構造であることや、庭園の範囲が 6000 m² を超え県内最大規模になることが判明。

③平成 28 年度

中城地区中央部の北側、特にその北西部を調査し、北池より北西方向にのびる大規模な溝跡などを発見。この溝跡は池の水の排水・貯水機能があったと推定。また、中城地区中央部全体がほぼ庭園で占められていたことが判明。

今回明らかとなったこと

- ★排水兼貯水用と推定された大規模な溝跡は、薬研堀状の池（池 4）。調整池としての機能。⇒薬研堀状の池は県内初。
- ★北池の全体像が把握でき、庭園に伴う池全体の規模が判明。
⇒約 1500 m²
- 北池の周辺で庭園の外と内をつなぐ園路発見。
⇒庭園の正門発見の可能性
- 「薬研堀状の池」設置に伴う土塁拡張の痕跡。
⇒城の改修工事が大規模なものだったことを物語る。

※本資料の作成は桜川市教育委員会生涯学習課が行いました。

真壁氏と真壁城について

●常陸平氏に祖を持つ真壁氏

【真壁氏の出自】

真壁氏は平安時代末期に真壁郡に郡司として入部した平長幹を初代とする常陸平氏の一族です。鎌倉幕府の記録である『吾妻鏡』の文治五年（1189）八月十二日条ではじめて歴史に登場する「真壁六郎」なる人物が平長幹と考えられています。

【領地】

真壁氏はおおむね旧真壁町・大和村・明野町付近（真壁郡）を領地とし、長岡や白井、椎尾、本木、飯塚などに一族を配しました。

【拠点】

真壁城は室町時代から戦国・安土桃山時代にかけての真壁氏の居城となっていました。戦国時代の当主 17 代真壁久幹により大幅に改修され、息子の氏幹まで使用されたことが発掘調査により明らかとなりました。また、近年の調査では、三の丸にあたる中城から大規模な建物跡群や能舞台、茶室、苑池などで構成された県内最大の城郭庭園が発見されています。

また、真壁城の城下町は現在の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）である「真壁の町並み」の基礎になっています。



航空写真

●国指定史跡真壁城跡

【立地】

南北に連なる筑波山系は、その稜線を境としていくつもの尾根が東西へと広がっています。真壁城は北西方向へのびる尾根が徐々に平地へと下り微高地となった位置に築かれています。

【城の形・規模】

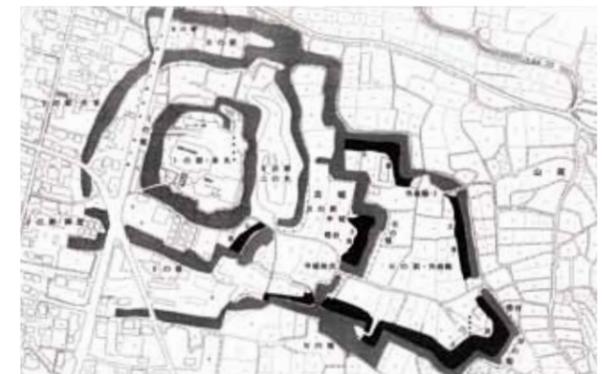
平地に築かれた城（平城）で、本丸を中心に二の丸、中城、外曲輪が外側を巡ります。北を田中川、南を山口川に挟まれた東西に長い城域をもち、規模は東西 850m、南北 400m を測ります。堀や土塁は「横矢がかり」という複雑な折れ構造となっています。

【年代】

室町時代後半（1450 年頃）に築城され、慶長 7 年（1602）の真壁氏の秋田移封とともに廃城となりました。築城当初は方形の館でしたが、幾度かの改変・改修を経て、現在の形となりました。大きな改変は 17 代真壁久幹の頃（16 世紀後半）に行われ、息子氏幹の頃に部分的な改修が行われました。

【史跡指定】

平成 6 年 10 月 28 日に国史跡となり、その範囲は堀や曲輪が良好にのこる東側全体で（本丸含む）、面積は約 12.5ha です。西側へも城域は広がっており、大字古城という地名で本来の真壁城の範囲を知ることができます。



全体図



史跡真壁城跡
中城地区中央部出土遺構模式図
(平成29年12月現在)



- : 平成29年度の主な調査区
- : 平成26～28年度調査区



筑波山方向

